

❀ 坪井清足元所長とのお別れ

奈良文化財研究所の第11代所長の坪井清足先生が、本年5月7日、享年94歳にて逝去されました。

去る6月25日、先生のご功績とお人柄を偲び、「坪井清足先生お別れの会」を奈文研と、公益財団法人大阪府文化財センター、公益財団法人元興寺文化財研究所が共同して、大阪府吹田市の千里会館で開催しました。当日は坪井先生と縁のある文化財関係者約400名が出席し、先生との思い出を語り合い、永久の別れを惜しましました。

坪井先生が奈良国立文化財研究所に入所されたのは、研究所創設間もない1955年のこと。平城宮跡の発掘調査を担当する最初の考古学研究者として採用されました。同年に平城宮跡の第1次発掘調査に着手しますが、翌56年には、大和平野農業用水導水路建設計画にともなう調査のため飛鳥地域に転戦。そこで飛鳥寺、川原寺、飛鳥板蓋宮伝承地等、考古学史に残る飛鳥の主要遺跡の発掘調査に携わりました。

1959年に再開した平城宮跡の調査では、3m四方の小地区を基本に、アルファベットと数字の組み合わせで調査地点を表示する方法を考案する等、大規模遺跡の調査方法と記録方法を確立しました。5BAS(飛鳥寺)といった遺跡の表記法や遺構の通し番号、瓦の型式番号等は、まさしく現代の情報化社会の到来を予見した措置であったといえます。さらに、発掘現場へのベルトコンベアーの導入、写真測量の遺構実測への応用、出土木簡や木製品の保存処理方法の開発、年輪年代法の導入と実用化等、先生は積極的に科学的な新手法の導入を推進されました。それらが現在、文化財保存の現場に広く普及していることを思うと、先生の卓越した先見性に頭が下がる思いです。

1965年に出向した文化財保護委員会事務局(現文化庁)記念物課では、高度経済成長期の開発優先の



祭壇に飾られた坪井清足元所長の遺影

世相の中で、工事で壊される遺跡の事前発掘調査のルールづくりに取り組まれ、同時に地方自治体の体制整備に尽力されました。1965年には発掘調査のできる都道府県の専門職員は8名にすぎませんでした。全国に専門職員の配置を働きかけ、ようやく1968年に35名に増えたといえます。現在の専門職員数は5724名(2015年度)であり、埋蔵文化財保護体制の充実に専念された先生の熱意が、今日、世界で最も精緻な保護体制の構築に結びついたといえるでしょう。

1966年に先生が主導してまとめられた野外考古学のバイブル『発掘調査の手びき』は、最新の調査方法を全国へ普及させ、日本考古学の発掘調査や記録方法の高次化を意図するものでした。同年には奈文研で地方公共団体の専門職員の研修事業を開始し、それが1974年の奈文研の「埋蔵文化財センター」の設置へとつながりました。

さらに先生は遺跡の整備と活用にも心を砕かれ、平城宮跡で様々な試みを実践されましたが、現在、そこで生まれた整備手法が全国に広がっています。また、市民に支持される考古学を目指して、発掘成果や研究成果のわかりやすい広報活動にも努められ、ビジュアルで印象に残る歴史展示を推進される等、先生の先駆的な業績は枚挙に暇がありません。

1986年に奈文研所長を退任されてからは、大阪府文化財センターの理事長、元興寺文化財研究所の所長を歴任され、最後まで文化財保護の最前線で活躍されました。

このように先生は、傑出した卓識と強力なリーダーシップによって、わが国の考古学の発展と文化財保護体制の充実に多大な貢献を果たされました。奈文研の育ての親である先生に改めて感謝申し上げるとともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。
(所長 松村 恵司)



お別れの会の様子